成果情報名	飼料用米（籾米）の基礎飼料２０％代替給与は、良質なみえ特産鶏の生産に利用可能
利 用 対 象	みえ特産鶏飼養農家（技術、参考）

【問題】

○全国各地での地鶏（銘柄鶏）作出による競争激化
○景気低迷による消費意欲の低下

↓

「美味しさ」や「味の多様化」などを求める
消費者ニーズに対応した鶏肉生産の必要性

○輸入飼料価格の高騰による飼料コストの増大

↓

国産飼料の最大限の活用
かつ肉質に悪影響を及ぼさない給与技術の必要性

【解決法】

飼料用米（籾米）の基礎飼料２０％代替給与（4 週齢～）
による味覚および生産性への影響を検討した。

【成果】

籾米給与による生産性は
通常飼育と変わらない。

表１　発育成績

区分	平均体重(g) 雄	雌	平均	飼料摂取量(g)	飼料要求率(%)	育成率(%)
対照区	3,262	2,463	2,863	9,363	3.27	98.7
試験区（籾20%）	3,281	2,474	2,877	9,480	3.30	98.7

※104日間の成績（4週齢時に体重を揃えて給与試験開始）
※♂は出荷の都合上、大きい個体に関しては14Wに出荷

約１割の飼料費低減が可能。

表２　飼料コスト

配合飼料	58円/kg
飼料用米（籾米）	30円/kg
籾米20%配合	52.4円/kg

「コク」や「味の濃さ」
が強まる傾向。
味覚に変化は生じるが
悪影響ではない。

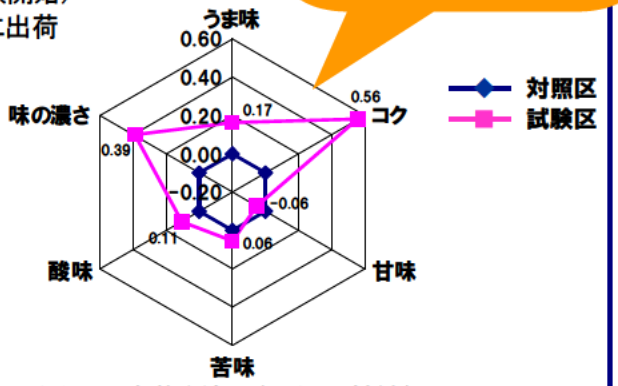

図１　官能評価（一対比較法）

味覚および生産性に悪影響を及ぼさないため、
良質なみえ特産鶏の鶏肉生産に利用可能である。

１．背景とこれまでの課題

全国各地での銘柄鶏（地鶏）の乱立による産地間競争の激化や、昨今の景気低迷による消費者の購買意欲の減退など、銘柄鶏（地鶏）を取り巻く環境は厳しさを増している。この現況の中で競争力を高めるためには、美味しさや味の多様性を求める消費者ニーズに対応した鶏肉の生産が必要となってくる。また、飼料価格高騰の影響から、みえ特産鶏の生産現場でも飼料用米や未利用資源の活用機会が増えており、これらの国産飼料を最大限に活用しつつも肉質に悪影響を及ぼさない生産方法の確立が望まれている。そこで、すでに生産現場でも活用が行われている飼料用米の給与が、鶏肉の味覚および生産性へ及ぼす影響を検討した。

２．成果の概要

１．生産性（飼養成績）は飼料用米（籾米）を基礎飼料の 20%代替することで、増体重、飼料摂取量および飼料要求率において、僅かに高い数値を示したが差は認められず、育成率も同等である。（表１）

２．味覚として「コク」や「味の濃さ」（図１）、「後味」などを強める傾向がみられる。

３．上記より、飼料用米（籾米）を基礎飼料の 20%代替することは、生産性（飼養成績）および鶏肉の味覚に悪影響を及ぼさないことから、良質なみえ特産鶏の鶏肉生産に利用可能である。

４．また、飼料コスト面においては、飼料用米（籾米）を基礎飼料の 20%代替することにより、およそ１割の飼料費低減効果が期待できる。（表２）

３．成果の慣行技術への適合性と経済効果

飼料用米（籾米）の基礎飼料への代替自体は容易であり、適合性は高いと考える。

また、飼料用米（籾米）を基礎飼料の20%代替することによって飼料費を約１割低減することが可能となり、29日齢より開始し112日齢まで飼育したとすると、１羽あたり約５０円の低減効果が見込まれる。

４．普及上の留意点

１．本結果はみえ特産鶏を各区（対照区：基礎飼料給与、試験区：籾米を基礎飼料の 20%代替給与）132 羽（22 羽×3 群×性）を供試したものである。

２．飼料用米は飼料用イネ専用品種「はまさり」で、籾米のまま未処理で 28 日齢より給与している。

３．籾米の使用については「飼料として使用する籾米への農薬の使用について」（平成 21 年 4 月 20 日付け農林水産省消費・安全局、生産局四課長通達）に留意する。

問い合わせ先	中小家畜研究課（養鶏担当）　西川 薫、西 康裕
参考になる資料	なし
研究実施予算	県単